東京藝術大学音楽学部 卒業生の音楽活動状況に関するアンケート集計結果

2018年4月2日

音楽創造・研究センター編

目次

| 1. | | ⁷ ンケート調査について | |
|----|------|-------------------------|----|
| | (1) | 趣旨 | 3 |
| | (2) | アンケート内容 | 3 |
| | (3) | 調査対象 | 3 |
| | (4) | 調査時期 | 4 |
| | (5) | 回答者数 | 4 |
| 2. | 集計 | 結果 | 4 |
| | (1) | 本学卒業・修了直後の状況 | 4 |
| | (2) | 本学卒業・修了直後の勤務時間数(時間/週) | 7 |
| | | 現在の勤務時間数(時間/週) | |
| | (4) | 現在の職業 | 10 |
| | | 昨年の年収 | |
| | (6) | 過去 3 年間の収入変化 | 15 |
| | (7) | 現在の仕事のうち、音楽関係が占める割合 | 16 |
| | (8) | 現在の仕事に関する満足度 | 18 |
| | (9) | 職を得た方法 | 19 |
| | (10) | 働く上で、特に必要だと思うスキル | 21 |
| | (11) | 在学中に身につけたかったスキル | 24 |
| 3. | おれ | っりに | 31 |
| 4. | 参考 | *: 配布アンケート | 32 |

1. 本アンケート調査について

(1)趣旨

2016年11月、音楽創造・研究センターでは、音楽活動支援の今後の方向性を見据えるための調査として、本学卒業者・修了者を対象に活動状況にかんするアンケートを実施した。以下はそのアンケート回答を集計・分析した報告である。今後、音楽活動支援をはじめとする各種支援の方向性を模索する際の参考資料として、広く活用いただけることを願う。本調査は、卒業生・修了者にご協力いただき実施されたものである。ご協力くださった皆様にはこの場をお借りして深く感謝申し上げたい。

(2) アンケート内容

最終ページに掲載。なお項目の選定は、インディアナ大学の Center for Postsecondary Research が中心になって進める Strategic National Arts Alumni Project(以下 SNAP)、アメリカの非営利団体 Future of Music Coalition が進める Artist Revenue Streams(以下 ARS)の公開データを参考に、本学に適した形を模索しつつおこなった。1

(3)調査対象

昭和51年度~平成19年度入学者(計32学年)を対象に、同声会名簿に記載の4275名の中から1000名にアンケートを送付。一般的に労働世代とされる20~60代を分析対象とした。

送付者の抽出方法は、以下の通りである。

専攻

- ・作曲、演奏などの音楽実践領域専攻より、可能な限り偏りのないように抽出
- ・音楽活動状況調査に特化した調査とし、楽理・音楽教育・音楽文芸・ソルフェージュ などの学科系専攻は対象外とした

抽出のバランス

・対象学年より 31 名~32 名ずつ抽出

学年毎の出身地域比率

・首都圏*: その他(首都圏以外)=21名:10名 [計31名] (平成12年度~19年度については、首都圏21名: その他11名 [計32名])

¹ SNAP は、アーティストの活動状況の向上を目指すプロジェクト&メガデータバンクである。2002 年に始動。主な出資者は Surdna Foundation で、2008 年にはここに日本円で約 2 億 5 千万円を寄付している。2013 年時点では、11 年の調査を経て、286 の芸術系大学から約 10 万人のデータを集計、公開。ジャンルは、演劇・建築・音楽・美術・写真・舞踊など多岐にわたる。http://snaap.indiana.edu/(2018 年 4 月 2 日閲覧)

ARS は、あらゆるジャンルの音楽家の有効な収入獲得について調査・共有するための研究プロジェクトである。2000 年に始動。複数組織からの後援を受けている。対象者に対して、①インタビュー、②複数年にわたる財政状況の記録調査、③オンライン調査、という 3 段階調査を実施。2011 年の調査では約 6700 人の回答を集めている。http://money.futureofmusic.org/(2018 年 4 月 2 日閲覧)

*首都圏=東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県・群馬県・栃木県・茨城県

・その他(首都圏以外)については、可能な限り地域が広範囲に渡るよう調整 教員(現職)の扱い

・比率上、3 学年に1名の割合で、常勤・非常勤を問わず本学教員も対象とした

(4)調査時期

送付:2016年11月11日 回答締切:2017年1月13日

(5)回答者数

送付者 1000 名のうち、179 名より回答を得た。

この 179 名のうち、1 名のみ集計対象(20 代 \sim 60 代)に当てはまらなかったため、集計対象は 178 名とした。

下記表は各項目に対する回答者数である。

| 項目 | 20代 | 30代 | 40 代 | 50 代 | 60 代 | 合計 |
|------------------------|-----|-----|------|------|------|-----|
| 1. 卒業・修了直後の状況 | 6 | 39 | 53 | 73 | 7 | 178 |
| 2. 卒業・修了直後の勤務時間数 | 6 | 27 | 39 | 63 | 7 | 142 |
| 3. 現在の勤務時間数 | 5 | 35 | 42 | 67 | 6 | 155 |
| 4. 現在の職業 | 4 | 39 | 52 | 72 | 7 | 174 |
| 5. 昨年の年収 | 3 | 28 | 32 | 57 | 3 | 123 |
| 6. 過去 3 年間の収入変化 | 5 | 37 | 49 | 72 | 7 | 170 |
| 7. 現在の仕事のうち、音楽関係が占める割合 | 5 | 35 | 49 | 72 | 7 | 168 |
| 8. 現在の仕事に関する満足度 | 5 | 34 | 48 | 59 | 6 | 152 |
| 9. 職を得た方法 | 5 | 29 | 39 | 58 | 3 | 134 |
| 10. 働く上で、特に必要だと思うスキル | 6 | 34 | 48 | 62 | 5 | 155 |
| 11. 在学中に身に付けたかったスキル | 6 | 30 | 43 | 59 | 4 | 142 |

20 代と 60 代に関しては、回答が少なかったため、一部の項目をのぞき、この年代にかんする有意差は認められない結果となった。30~50 代に関しては、おおよそ平均値を捉えるに足る回答を得ることができた。

2. 集計結果

以下は、アンケート回答をもとに作成した集計結果である(個人情報を含む質問項目を除く)。

(1) 本学卒業・修了直後の状況 【アンケートの質問番号8】

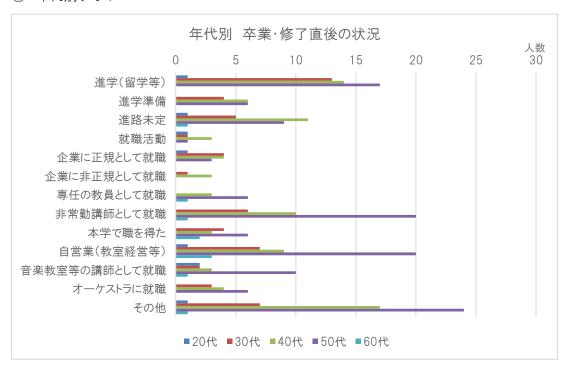
·有効回答数:178/178(有効回答数/返送数)

・該当欄に〇(複数回答可)。項目は下記表①の通り。

① 年代別表(各項目の右数字は全体からの比率数)

| 項目 | 20 代 | 30代 | 40 代 | 50 代 | 60代 |
|---------------|---------|----------|----------|----------|---------|
| 進学(留学等) | 1 (17%) | 13 (33%) | 14 (26%) | 17 (23%) | 0 (0%) |
| 進学準備 | 0 (0%) | 4 (10%) | 6 (11%) | 6 (8%) | 0 (0%) |
| 進路未定 | 1 (17%) | 5 (13%) | 11 (21%) | 9 (12%) | 1 (14%) |
| 就職活動 | 1 (17%) | 1 (3%) | 3 (6%) | 1 (1%) | 0 (0%) |
| 企業に正規として就職 | 1 (17%) | 4 (10%) | 4 (8%) | 3 (4%) | 0 (0%) |
| 企業に非正規として就職 | 0 (0%) | 1 (3%) | 3 (6%) | 0 (0%) | 0 (0%) |
| 専任の教員として就職 | 0 (0%) | 0 (0%) | 3 (6%) | 6 (8%) | 1 (14%) |
| 非常勤講師として就職 | 0 (0%) | 6 (15%) | 10 (19%) | 20 (27%) | 1 (14%) |
| 本学で職を得た | 0 (0%) | 4 (10%) | 3 (6%) | 6 (8%) | 2 (29%) |
| 自営業(教室経営等) | 1 (17%) | 7 (18%) | 9 (17%) | 20 (27%) | 3 (43%) |
| 音楽教室等の講師として就職 | 2 (33%) | 2 (5%) | 3 (6%) | 10 (14%) | 1 (14%) |
| オーケストラに就職 | 0 (0%) | 3 (8%) | 4 (8%) | 6 (8%) | 0 (0%) |
| その他 | 1 (17%) | 7 (18%) | 17 (32%) | 24 (33%) | 1 (14%) |
| 全回答数 | 6 | 39 | 53 | 73 | 7 |

② 年代別グラフ



一般大学の卒業生とは異なり、音楽家の場合、この結果から捉えられる側面として、年代間の状況変化と個人の認識変化の2面があると考えられる。つまり、純粋に①年代間の社会状況の変化として捉えられる側面と、②キャリア展開におけるフリーランス活動の定着にともなう自己認識の変化として捉える側面の2面である。

そこでまず、①年代間の社会状況の変化として捉えた場合、まず3番目の項目の「進路未

定」に着目すると、これを回答した割合がもっとも高かったのは 40 代(21%) であった。 総体的に全体の回答数が少ないため確定的にとらえることはできないが、この状況は総じて、団塊ジュニアや第二次ベビーブーム世代などと呼ばれるこの世代の就職状況が、とくに 困難であったとされる一般論に即した結果と考えられる。

また12番目の項目にある「オーケストラに就職」の選択者数は、上の世代から見ていくと6人/50代、4人/40代、3人/30代、0人/20代ときれいな下降ラインをたどっている。これも断定的な指摘はできないものの、すでに叫ばれて久しい昨今のオーケストラの財政難にともなう新規ポストの縮小化の影響が考えられる。

続いて、②キャリア展開におけるフリーランス活動の定着にともなう自己認識の変化として捉えた場合、20代・60代は全体の有効回答数自体が6名・7名と少なく、「進路未定」を選択したのはそれぞれ1名であるため、本来であればここに有意差は認められない。だが20代に関しては、ここに別の事情も勘案されるべきであろう。すなわちアンケート回答が少ない状況そのものが、不安定な活動状況を反映している可能性がある。現に、本学が実施・公開している新卒業生に対する過去5年の進路調査2では、新卒業生のほぼ全員が回答した結果で、下記表のとおり、卒業直後の「未定・他」の割合が全体の約50~60%ときわめて高いことが分かる。3

| 区分 | 卒業者 | 就職 | 非常勤/ 自営 | 進学 | 未定·他 | 「未定·他」 の割合(%) |
|-------------------|-----|----|------------|----|------|------------------|
| 平成 29 年 3 月卒業·修了者 | | | | | | |
| 学部 | 220 | 16 | 25 | 78 | 101 | 46 |
| 修士課程 | 127 | 10 | 27 | 16 | 74 | 58 |
| 博士課程 | 18 | 2 | 3 | 0 | 13 | 72 |
| 平成 28 年 3 月卒業·修了者 | | | | | | |
| 学部 | 228 | 17 | 20 | 64 | 127 | 56 |
| 修士課程 | 119 | 13 | 32 | 13 | 61 | 51 |
| 博士課程 | 17 | 0 | 8 | 1 | 8 | 47 |
| 平成 27 年 3 月卒業·修了者 | | | | | | |
| 学部 | 239 | 24 | 25 | 71 | 119 | 50 |
| 修士課程 | 119 | 8 | 26 | 19 | 66 | 55 |
| 博士課程 | 16 | 2 | 8 | 1 | 5 | 31 |
| 平成 26 年 3 月卒業・修了者 | | | | | | |
| 学部 | 228 | 11 | 7 | 81 | 129 | 57 |
| 修士課程 | 113 | 15 | 10 | 14 | 74 | 65 |
| 博士課程 | 16 | 2 | 5 | 1 | 8 | 50 |
| 平成 25 年 3 月卒業·修了者 | | | | | | |
| 学部 | 237 | 14 | 3 | 80 | 149 | 63 |
| 修士課程 | 122 | 14 | 6 | 16 | 86 | 70 |
| 博士課程 | 14 | 2 | 0 | 0 | 12 | 86 |

https://www.geidai.ac.jp/wp-content/uploads/2017/05/6c75f02e528e5503f8f2492170b1c206.pdf (2018 年 4 月 2 日間管)

² 東京藝術大学ウェブサイト「最近5年の進路状況」

 $^{^3}$ 「過去 5 年の進路調査」より、音楽学部および大学院音楽研究科のデータのみを抽出。こちらには学科系専攻のデータも含まれる

「未定・他」の選択平均

| 学部 | 54 |
|------|----|
| 修士 | 60 |
| 博士 | 57 |
| 総合平均 | 57 |

こうした数字が芸大生の就職率の低さとして注目される所以であろう。だが注意したいのは、音楽家の場合、非就職率は専門家としての非就労率を意味するわけではないという点である。おそらく多くの卒業直後の音楽家がかかわる活動のあり方に、「フリーランス音楽家」があり、卒業・修了直後からこの活動を始めることにな

った場合、生活設計が見えない状態であればなおさら、進路調査には「未定」と記入せざる をえない心理が想像される。

ここで本アンケート調査の当該項目で「その他」を選択した人の記入内容を確認したい。 この自由記入欄に「フリーランス音楽家」に類する内容を記入した回答者の人数と割合をま とめたのが下記表である。20代・60代は人数が少ないため対象外とすると、ほかの年代で は71~86%というきわめて高い割合で「フリーランス音楽家」に類する内容が記入された 様子が見て取れる。

| 年代 | 「その他」選択数 | 記入欄に「フリーランス」と書いた人数 | 割合 | 全選択数からの割合 |
|------|----------|--------------------|------|----------------|
| 20 代 | 1 | 1 | 100% | 17% |
| 30代 | 7 | 5 | 71% | 13% |
| 40 代 | 17 | 11 | 65% | 21% |
| 50 代 | 24 | 21 | 86% | 29% |
| 60代 | 1 | 1 | 100% | 14% |

進路先の項目全体からの割合を見ると、30代以降、つまりある程度、自身の活動が定着したと思われる世代では、卒業後の状況は「フリーランス音楽家」であったと認識・回想している様子がうかがえる。さらに先の①年代別表(pp.4-5)のとおり、40代と50代では卒業後の状況として「その他」を回答した者が最多で、このうちのそれぞれ65%・86%が「フリーランス音楽家」と記入しており、つまりこの世代では全体でみると2~3割が、卒業・修了直後にフリーランス音楽家として活動したと回想していることが分かる。

「フリーランス音楽家」とは、フリーとも略した呼称も使われるが、日々のアルバイトで生計を立てるいわゆるフリーターとは異なる。そうではなく、個人事業者としてセルフマネジメントをおこない、外部からの依頼に個人で対応する専門的な音楽家のことである。仮にもし今後、大学の進路調査で「自営」の項目を「自営(教室経営やフリーランスも含む)」などとした場合には、「未定・他」欄の選択数に何らかの変化が見られる可能性が考えられる。とはいえここに自信をもってチェックできる新卒業生とは、在学中からフリーランス音楽家として活動するための準備をしてきた者で、直後から活動を本格化できる自信のある者に限られるかもしれない。

(2) 本学卒業・修了直後の勤務時間数(時間/週)【アンケートの質問番号9】

- · 有効回答数: 142 / 178
- ・週におよそ何時間働いていたか、週あたりの時間数を記入
- ・「自由」・「不定期」といった回答は無効回答とした
- ・「留学中」は原本を確認した結果「学生」と見なし、0時間/週とした

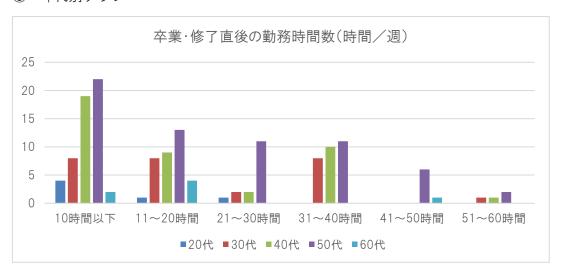
① 全体の回答(時間数をまたがる回答があるため、下記の数字は延べ人数)

| 時間/週 | 10 未満 | 11~20 | 21~30 | 31~40 | 41~50 | 51~60 |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 該当数(人) | 55 | 35 | 16 | 29 | 7 | 4 |

② 全体の時間別グラフ



③ 年代別グラフ



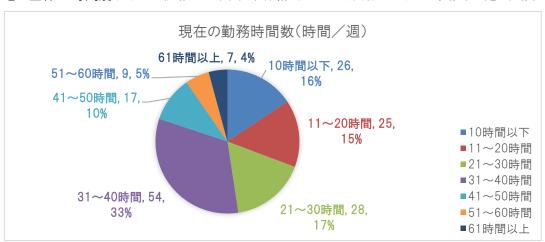
②の円グラフにあるとおり、全体の37%が卒業・修了直後、週に10時間以下の勤務と回答している。11~20時間と合わせると、その回答は61%に上る。「(1)本学卒業・修了後の状況」の①年代別表(pp.4-5)のとおり、「進学(留学等)」が1位だったのは30代のみであった(33%)。ここには、卒業・修了直後、に仕事がない状況が端的に表われている。実際問題として、この状況では自立は不可能であろう。なお60代を除くすべての年代で卒業直後の勤務時間は「10時間以下」が最多回答であった。40代にいたっては半分に迫る46%が「10時間以下」と答えており、これは40代の一般的な就職難に言及した先の考察と一致す

る。

(3) 現在の勤務時間数 (時間/週) 【アンケートの質問番号 10】

- · 有効回答数: 156 / 178
- ・現在、週におよそ何時間働いているか、週あたりの時間数を記入
- ・「自由」・「不定期」といった回答は無効回答とした
- ・「留学中」は原本を確認した結果「学生」と見なし、0時間/週とした

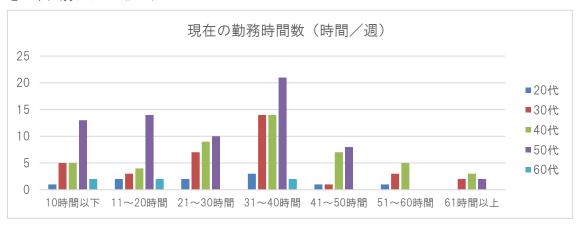
① 全体の時間別グラフ(人数、比率%)(時間数をまたがる回答があるため、数字は延べ人数)



② 年代別表(各枠の%は全体からの比率)(時間数をまたがる回答があるため、数字は延べ人数)

| | 10 時間以下 | 11~20 時間 | 21~30 時間 | 31~40 時間 | 41~50 時間 | 51~60 時間 | 61 時間以上 | 全体 |
|------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|----|
| 20代 | 1 (10%) | 2 (20%) | 2 (20%) | 3 (30%) | 1 (10%) | 1 (10%) | 0 (0%) | 10 |
| 30代 | 5 (14%) | 3 (9%) | 7 (20%) | 14 (40%) | 1 (3%) | 3 (9%) | 2 (6%) | 35 |
| 40 代 | 5 (11%) | 4 (9%) | 9 (19%) | 14 (30%) | 7 (15%) | 5 (11%) | 3 (6%) | 47 |
| 50代 | 13 (19%) | 14 (21%) | 10 (15%) | 21 (31%) | 8 (12%) | 0 (0%) | 2 (3%) | 68 |
| 60代 | 2 (33%) | 2 (33%) | 0 (0%) | 2 (33%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 6 |

③ 年代別グラフ (同上)



まず先の本学卒業・修了直後の勤務時間数と比較すると、現在の勤務時間数では、下記の とおり 20 時間以下の回答者が減少するとともに、21 時間以上の回答者がおしなべて増えて おり、現状の就労状況が改善されている様子が見てとれる。

| | 卒業直後の 勤務時間数 | 現在の 勤務時間数 | |
|----------|----------------|--------------|----------|
| 10 時間以下 | 37% | 16% | > |
| 11~20 時間 | 24% | 15% | \ |
| 21~30 時間 | 11% | 17% | > |
| 31~40 時間 | 20% | 33% | > |
| 41~50 時間 | 5% | 10% | ^ |
| 51~60 時間 | 3% | 5% | ~ |
| 61 時間以上 | 0% | 4% | 7 |

厚生労働省ウェブページ⁴ によると、法定労働時間は週に 40 時間以内とされるが、本調査結果では、全体の約 20%が 41 時間以上と回答している。②年代別表からは、すべての年代で「31~40 時間」という回答が最も多い様子も確認できる。一方、全体の 31%はなおも「20 時間以下」と回答している。

(4) 現在の職業 【アンケートの質問番号 12】

- 有効回答数: 174 / 178
- ・現在の職業について、具体的に記述
- 自由回答、複数回答可
- ・自由回答のため、分類できない記述あり

① 記述回答された職業を下記 12 種別に分類

- 自営(教室経営等):「指導」・「自宅」・「個人」といったキーワードを含む
- 常勤教員
- 非常勤講師
- 演奏家(フリーランス):「演奏」・「活動」のどちらか一方もしくは両方のキーワードを含む、あるいは記述からフリーランス音楽家と判断できるもの。それ以外は「その他」に分類
- 音楽教室等の講師
- オーケストラ団員
- 合唱指導
- コンクール審査
- 伴奏
- カルチャーセンター講師
- 会社員(正社員)
- ◆ その他

_

⁴ 厚生労働省ホームページ「労働時間・休日に関する主な制度」

http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/koyou_roudou/roudoukijun/roudouzikan/index.html(2018 年 4 月 2 日閲覧)

② 全体の回答数(降順)(複数回答可のため、数字は延べ人数)

| 職業 | 人数 |
|-------------|----|
| 演奏家(フリーランス) | 66 |
| 常勤教員 | 42 |
| 非常勤講師 | 41 |
| その他 | 35 |
| オーケストラ団員 | 22 |
| 合唱指導 | 9 |
| 自営(教室経営等) | 8 |
| 音楽教室等の講師 | 8 |
| 会社員(正社員) | 4 |
| カルチャーセンター講師 | 3 |
| コンクール審査 | 2 |
| 伴奏 | 2 |

③ 年代別・性別表(各枠の%は世代全体からの比率)(複数回答可のため、下記数字は延べ人数)

| | | (教室経営等) | 常勤教員 | 非常勤講師 | ランス) 演奏家(フリー | 講師 音楽教室等の | 団員 オーケストラ | 合唱指導 | 審査クール | 伴 奏 | センター講師カルチャー | 会社員) | その他 | 合計 |
|----|----|------------|-------------|-------------|--------------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-------------|-----|
| | 男性 | | | 1 | | | | | | | | | | 1 |
| 20 | 女性 | | | | 1 | | 1 | | | | | | 1 | 3 |
| 代 | 全体 | | | 1 (25%) | 1 (25%) | | 1 (25%) | | | | | | 1 (25%) | 4 |
| | 男性 | | 1 | 3 | 4 | 1 | 5 | | | | | | 3 | 17 |
| 30 | 女性 | | 2 | 5 | 12 | 2 | 5 | 2 | | | | 1 | 8 | 37 |
| 代 | 全体 | | 3 (6%) | 8 (15%) | 16 (30%) | 3 (6%) | 10 (19%) | 2 (4%) | | | | 1 (2%) | 11 (20%) | 54 |
| | 男性 | | 10 | 1 | 7 | | 2 | | | | | 2 | 3 | 25 |
| 40 | 女性 | 2 | 7 | 8 | 10 | 2 | 3 | 2 | 1 | | | 0 | 11 | 46 |
| 代 | 全体 | 2 (3%) | 17 (24%) | 9 (13%) | 17 (24%) | 2 (3%) | 5 (7%) | 2 (3%) | 1 (1%) | | | 2 (3%) | 14 (20%) | 71 |
| | 男性 | | 11 | 5 | 8 | | 3 | 3 | | | | 1 | 4 | 35 |
| 50 | 女性 | 5 | 8 | 16 | 22 | 3 | 3 | 2 | 1 | 2 | 3 | | 5 | 70 |
| 代 | 全体 | 5 (5%) | 19 (18%) | 21 (20%) | 30 (28%) | 3 (3%) | 6 (6%) | 5 (5%) | 1 (1%) | 2 (2%) | 3 (3%) | 1 (1%) | 9 (8%) | 105 |
| | 男性 | 1 | 2 | 1 | 2 | | | | | | | | | 6 |
| 60 | 女性 | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | | | 3 |
| 代 | 全体 | 1 (11%) | (33%) | 2 (22%) | (33%) | | | | | | | | | 9 |

①職業種別からは、「その他」や「会社員」も含まれるものの、ほとんどの業種が音楽教育活動関係となっている。

また②全体の回答数によると、「演奏家(フリーランス)」の回答がもっとも多い。先述の「(1)本学卒業・終了直後の状況」の結果と関連させると、卒業直後からフリーランス音楽家として活動し、さらに生涯にわたるキャリアにおいても、継続してフリーランスで活動

している様子が確認できる。また(3)現在の勤務時間数では全体の19%が週41時間以上の労働時間と回答していたが、フリーランスの場合、労働時間は自分で管理するため、勤務時間数に制限がないという状況も影響しているのかもしれない。また日々の練習時間は勤務時間としてもちろん換算されていないであろう。「現在の職業」ではつづいて2位に「常勤教員」が、3位に「非常勤講師」が挙がった。教育機関関係者も高い割合でいることが分かる。

③年代別・性別表を見ると、回答数の少ない 20 代と 60 代を除き、30 代で有意差の認められる項目として、「オーケストラ団員」が挙げられる。男女の回答数比率が約1:2 であるのに対し、「オーケストラ団員」はどちらも同じ5 件であるため、つまり男性が2 倍の就職率となっていることが分かる。また30 代の「常勤教員」の数字を40 代と比較すると、30 代では全体の6%であったのが、40 代になると24%となり、大きく状況が異なることが分かる。

40代の1位は「演奏家(フリーランス)」と「常勤教員」であり、後者の内訳は大学教員が多かった。ここからは大学で常勤職を得られるのは早くて30代後半、多くが40代以降ということが言えそうである。また30代の「オーケストラ団員」と同様、40代の「常勤教員」の男女比は、回答数比率がここも約1:2であるのに対し、10件:7件となっており、男性が約3倍の就職率となっている。40代女性は他の年代に比べて「主婦」(「その他」への自由記入欄)との記載も多かった。

50代の回答では「演奏家(フリーランス)」が全体の28%で1位、続いて「非常勤講師」(20%)、「常勤教員」(18%)とつづく。男女の回答数比率(1:2)に鑑みると「オーケストラ団員」・「常勤教員」は30~40代と同様、男性の就職率が女性の2~3倍であることが確認できる。対照的に、「非常勤講師」や「フリーランス」は女性が約1.5倍多く挙げている。40~50代の女性の多くがこうした非常勤・フリーランスの就労状況となっている背景には、結婚・出産・育児にかかわる女性の労働環境からの影響が考えられるであろう。

(5) 昨年の年収【アンケートの質問番号 14】

• 有効回答数: 123 / 178

・昨年の年収を数字で記入

• 自由回答

① 年代別·平均年収

| 年代 | | 平均年収(円) | | 回答数 |
|------------------|------|---------|-------|-----|
| +1 10 | 全体 | 男性 | 女性 | 凹合数 |
| 20代 | 377万 | 180万 | 475 万 | 3 |
| 30代 | 392万 | 488万 | 321 万 | 28 |
| 40 代 | 601万 | 649 万 | 576万 | 32 |
| 50代 | 561万 | 865 万 | 340万 | 57 |
| 60 代 | 560万 | 340万 | 1000万 | 3 |

20代・60代では回答数が少ないため、有意差は認められない。以下は「転職サービス DODA」 から公開されている 2015 年の会社員の年齢別平均年収データ⁵ である。

| 年代 | 平均年収(円) | | | | |
|-----------------|---------|-------|-------|--|--|
| +1 \ | 全体 | 男性 | 女性 | | |
| 20代 | 349 万 | 368万 | 324 万 | | |
| 30代 | 456 万 | 488 万 | 384 万 | | |
| 40代 | 572万 | 616万 | 433 万 | | |
| 50代 | 708 万 | 742 万 | 479 万 | | |
| 60代 | | | | | |

両者を比較すると、芸大卒業生の側で、男女全体で30代ではマイナス64万円、40代ではプラス29万円、50代ではマイナス147万円という結果となった。

特に 50 代の差が著しいが、この年代の年収が一般会社員よりここまで少なかったのは、 女性回答率が男性を大きく上回ったことが一因と考えられる(50 代男女の有効回答数は、 24:33 名)。①年代別・平均年収の表でも 50 代女性の平均年収は男性より 500 万円以上低い結果が出ている。下記表は 50 代で昨年の年収について「100 万円以下」・「200 万円以下」と答えた人の男女比率の一覧であるが、ここからも女性のみが該当していることが分かる。

表:50代で昨年の年収について「100万円以下」・「200万円以下」と答えた人の男女別割合

| 性別 | 100 万円以下 | 200 万円以下 |
|----|----------|----------|
| 男性 | 0% | 0% |
| 女性 | 27% | 39% |

また先の(3)現在の勤務時間数の②年代別表では、50代の40%が「20時間以下」と回答しており、その男女内訳を見るとやはり下記表のとおり、男性13%、女性52%であった。

表:50代で現在の勤務時間について「20時間未満」と答えた人の割合

| 性別 | 20 時間未満 |
|----|---------|
| 男性 | 13% |
| 女性 | 52% |

したがって、50 代女性の「勤務時間数が少ないため年収も低い」という勤務状況が、上記の平均年収差に影響したと考えられる。今回の調査では、結婚をはじめ育児や介護、男性の転勤にともなう引っ越しなど、女性特有の生活環境を特定する質問は設定していなかった。だが上で見てきた結果から類推すると、生活環境の変化に対応しながらも、幼少期より培ってきた専門的な知識・技術を生かした仕事ができているともいえるだろう。

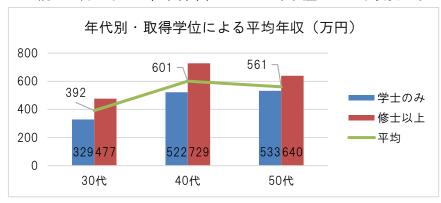
② 年代別·取得学位別

取得学位と年代別の平均年収を統計したところ、次のような結果を得た。20代・60代については、それぞれ回答数3と少ないため検証不可とする。また博士号取得者の数が少ないため、「修士以上」と分類した。

⁵ 「転職サービス DODA 平均年収ランキング 2015 年齢別」。https://doda.jp/guide/heikin/2015/age/ (2018 年 4 月 2 日閲覧)

| 年代 | 学士のみ修士以上 | | 差 |
|------|----------|--------|--------|
| 20代 | | | |
| 30代 | 329 万円 | 477 万円 | 148 万円 |
| 40 代 | 522 万円 | 729 万円 | 207 万円 |
| 50代 | 533 万円 | 640 万円 | 107 万円 |
| 60 代 | | | |

①年代別・平均年収と同様に、50代の年収が40代よりも少ない背景には、50代女性をめぐる勤務状況の影響と考えられる。ここで注目したい点として、どの年代においても「修士以上」の年収が「学士のみ」の年収を上回る結果となっていることである。また、その額にもかなり大きな差さがあることが分かる。いずれも全体母数が少ないなかでの平均値のため一概には言えないが、取得学位によって年収差が生じる状況がうかがえた。

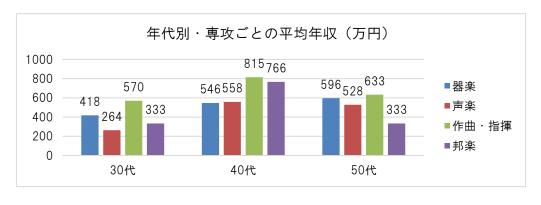


③ 年代別·専攻別

続いて専攻と年代別の平均年収を統計し、次のような結果を得た(20代・60代については、それぞれ回答数3と少ないため対象外)。

| 年代 | 器楽 | 声楽 | 作曲・指揮 | 邦楽 |
|------|--------|--------|--------|--------|
| 20代 | | | | |
| 30代 | 418 万円 | 264 万円 | 570 万円 | 333 万円 |
| 40 代 | 546 万円 | 558 万円 | 815 万円 | 766 万円 |
| 50代 | 596 万円 | 528 万円 | 633 万円 | 333 万円 |
| 60 代 | | | | |

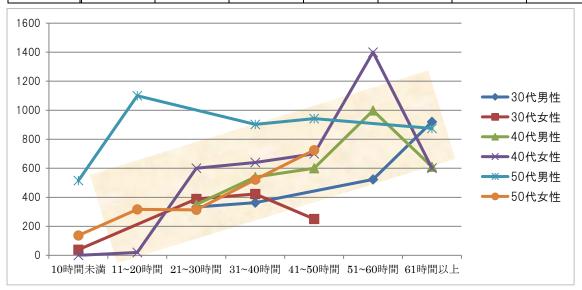
30~50 代のいずれの年代も「作曲・指揮」専攻の年収が1位であった。最低値はすべて 異なる専攻であったが、専攻による年収差の傾向もうかがえる結果となった。



④ 就労時間別・年代別・男女別

以下では30~50代について、(3) 現在の勤務時間数と(5) 昨年の年収を対照し、それぞれの平均値を示したものである(20代・60代は回答数が少ないため対象外)。データの算出方法は、いずれも有効回答となっているものに限り、年代毎に年収平均値を算出した。なお「——」の部分は該当者なしの項目である。

| 年収 (万円) | 10 時間未満 | 11~20 時間 | 21~30 時間 | 31~40 時間 | 41~50 時間 | 51~60 時間 | 61 時間以上 |
|------------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|
| 30 代男性 | | | 333 万円 | 363 万円 | | 523 万円 | 920 万円 |
| 30 代女性 | 39 万円 | | 388 万円 | 423 万円 | 250 万円 | | |
| 40 代男性 | | | 350 万円 | 540 万円 | 600 万円 | 998 万円 | 610 万円 |
| 40 代女性 | 0円 | 20 万円 | 600 万円 | 640 万円 | 699 万円 | 1400 万円 | 600 万円 |
| 50 代男性 | 515 万円 | 1100 万円 | | 903 万円 | 942 万円 | | 875 万円 |
| 50 代女性 | 137 万円 | 317 万円 | 313 万円 | 522 万円 | 725 万円 | | |



上記のグラフからは、50 代男性を除き、すべての年代・男女において勤務時間数が増えるほどだいたい同じ割合で比例的に年収も増えていく相関性が認められる。特に50 時間以下まではほぼ同一帯上に重なっている。ここからは、時間数・年代・性別・年収にかかわらず、大体において等しい時間給で就労している状況が浮かび上がったといえる。

なお例外として 50 代男性には時間数と年収との相関性がまったく見られない結果となった。時間数が少なくても年収が高く、時間数がどんなに多くても年収が横ばいというのは通常は考えられないことから、有効回答の個人差が大きく反映された結果と考えられる。

(6)過去3年間の収入変化 [アンケートの質問番号 15]

· 有効回答数: 170 / 178

・過去3年間の収入変化について、「増加した」・「減少した」・「変わらない」の3択に○

① 年代別

20代・30代では「増加した」との回答が最も多かった。40・50代では約半数の49%が「変わらない」と答え、60代では「減少した」が最も多い結果となった。これは退職年齢が含まれるからであろう。先の(5)昨年の年収の①年代別・平均年収と照合すると、本調査の結果からは年収のピークを迎えるのは40代~50代ということになる。

② 男女差

「増加した」の回答に注目すると、以下のような男女差があることが分かった(回答数の少ない20・60代は対象外)。

「増加した」と回答した人の年代・性別割合

20代 30代 40代 50代 60代

| 年代 | 男性 女性 | | |
|------|---------|-----|--|
| 30 代 | 62% | 58% | |
| 40 代 | 60% | 28% | |
| 50 代 | 37% | 27% | |

特に40代・50代で男性の回答率が女性を上回り、その差は40代で最も大きい。

(7) 現在の仕事のうち、音楽関係が占める割合【アンケートの質問番号 16】

- · 有効回答数: 168 / 178
- ・パーセンテージを自由に記入

① 年代別・性別

20代は有効回答数5、60代は同7と少ないため、対象外とする。下記では30~50代の年

代別・性別の状況を概観する(設定した割合をまたがる回答があるため、以下の数字は延べ 人数)。







グラフのとおり、いずれの年代でも「100%」の回答率が突出している様子が分かる。例外的に、40代の女性で「0%」が目立つのは、前述の(4)現在の職業で「その他」が一位を占めていることと関連している。40代女性の24%が「その他」に分類される回答をしており、その内訳として主婦や音楽関係以外の仕事に就いていることが記されているため、0%が他の年代よりも目立つ結果となった。また子育て世代であることの影響も否めない。

世代別・男女別でそれぞれ「100%」と回答した人の割合は、以下の通りである。

| 年代 | 男 | 女 |
|------|-----------------|----------------|
| 20 代 | 100% | 75% |
| 30代 | 53% | 45% |
| 40 代 | 55% | 48% |
| 50代 | 59% | 71% |
| 60代 | 80% | 50% |

回答数の少ない 20 代・60 代を除くと、男性で「100%」との回答が最も多いのは 50 代だが、各年代による有意差は特に認められない。一方、女性で最も多いのも 50 代だが、30 代・40 代と比較すると 20%以上の差がある。

年代別・学位別でそれぞれ「100%」と回答した人の割合は、以下の通りである。

| 年代 | 学士のみ | 修士以上 |
|------|------|------|
| 20代 | 66% | 100% |
| 30代 | 52% | 42% |
| 40 代 | 43% | 75% |
| 50 代 | 68% | 66% |
| 60 代 | | 83% |

こちらも回答数の安定している 30 代~50 代で比較すると、40 代では、取得学位により 30%以上の差が出ており、修士以上の学位取得者の方がより多く音楽に関わる仕事に就いている。一方、30 代では反対に、学士の学位取得者の割合が 10%上回っている。これらの結果からは、音楽に関わる仕事を得るのに取得学位は特に関係ないということが言える。

(8) 現在の仕事に関する満足度 [アンケートの質問番号 17]

- · 有効回答数: 152 / 178
- ・「満足している」・「不満がある」・「その他」の3択に○、その理由を記入
- ・「満足している」と「不満がある」の両方に○をした回答は有効とし、それぞれに1回答とする(複数回答可)。

① 全体・男女別

有効回答数 152 件のうち、全回答者の 65%が「満足している」を選択しており、現在の 仕事に半数以上が満足していることが分かった。男性の回答は 60 件、女性の回答数は 92 件 で、「満足している」の回答に有意差は見られなかった。

| | 全体 | 男性 | 女性 |
|--------|-----------|-----------|-----------|
| 満足している | 99件(65%) | 41件 (68%) | 58件 (63%) |
| 不満がある | 31件 (20%) | 13件 (22%) | 18件(20%) |
| その他 | 22件(14%) | 6件(10%) | 16件(17%) |
| 有効回答数 | 152 件 | 60 件 | 92 件 |

この状況を、本調査と似た方式(細かな指数統計ではなく、「満足している」「どちらでもない」「不満足である」の三択による調査)でおこなった「労働経済分析レポート」(厚生労働省が2017年8月に公開)6と比較すると、一般職の「正規雇用転換」、「非正規雇用を継続」の満足度がそれぞれ42.8~44.8%、40.6~33.3%という数字であることから、本学卒業生の数字はきわめて高いことが分かる。

② 年代別 · 学位別

20代・60代については有効回答数がそれぞれ5、6と少ないため、対象外とした。

| | | 30代 | | | 40代 | | | 50代 | |
|--------|---------|---------|----------|---------|---------|----------|---------|---------|----------|
| | 全体 | 学士 | 修士 以上 | 全体 | 学士 | 修士 以上 | 全体 | 学士 | 修士 以上 |
| 満足している | 24(71%) | 15(79%) | 11(69%) | 28(58%) | 18(62%) | 8(47%) | 38(64%) | 27(75%) | 10(43%) |
| 不満がある | 8(24%) | | | 12(25%) | | | 10(17%) | | |
| その他 | 2(6%) | | | 8(17%) | | | 11(19%) | | |
| 有効回答数 | 34 | 19 | 16 | 48 | 29 | 17 | 59 | 36 | 23 |

「満足している」の回答率を年代別に確認すると、30代では全体の70%、40代では全体の58%、50代では全体の64%が選択している。また30代~50代のすべての年代において、学士のみの学位取得者の方が満足度が高いという結果が出た。

③ 理由(記述を要約)

○満足している

経済面よりは「自分の好きなことで仕事ができる(30代男性)」など、音楽を続けられていることへの満足度が高い様子。また後進の指導にあたる喜びの声も多かった(教育関係の仕事)。

○不満

ほとんどが「収入が不安定」、「音楽に関わる時間が少ない」という理由。その他は個々人の環境に応じた具体的な不満。

(9) 職を得た方法【アンケートの質問番号 18】

- · 有効回答数 134 / 178
- ・「どのようにして現在の職を得ましたか」という自由回答の質問。複数回答可。

⁶ 厚生労働省 2017 年 8 月 「労働経済分析レポート No.1」 http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12600000-Seisakutoukatsukan/roudoukeizaibunseki-report_No.1_1.pdf (2018 年 4 月 2 日閲覧)

① 記述回答を下記の5つに分類

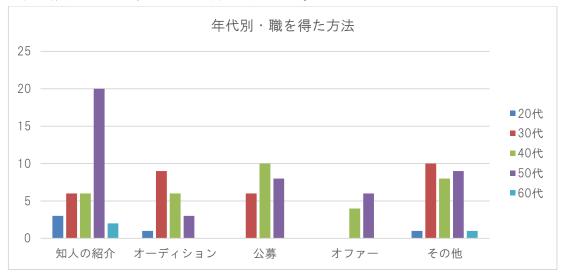
- 知人の紹介(口コミを含む)
- オーディション
- 公募(教員採用を含む)
- オファー
- その他

② 年代別

5つに分類した項目の年代別集計結果は以下の通りである。複数回答が可能なため、数字は延べ人数である。

| 年代 | 知人の紹介 | オーディション | 公募 | オファー | その他 | 合計数 |
|------|----------|---------|----------|---------|----------|-----|
| 20代 | 3 (60%) | 1 (20%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 1 (20%) | 5 |
| 30代 | 6 (19%) | 9 (29%) | 6 (19%) | 0 (0%) | 10 (32%) | 31 |
| 40 代 | 6 (18%) | 6 (18%) | 10 (29%) | 4 (12%) | 8 (24%) | 34 |
| 50代 | 20 (43%) | 3 (7%) | 8 (17%) | 6 (13%) | 9 (20%) | 46 |
| 60代 | 2 (67%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 1 (33%) | 3 |

上記の数字をグラフ化したのが下記の図である。



回答数が少なかった 20 代・60 代は対象外とする。これらの結果から、最多回答は年代ごとに異なることが分かる。ここも 50 代では「知人の紹介」が 43%と突出して高い様子が分かる。一方 30 代では 1 位は「その他」だが、次いで「オーディション」との回答が多く、29%であった。40 代では「公募」が最多回答で、29%が該当している。

「オファー」の項目に20代・30代が該当していないという結果も目立っている。もしかすると、「知人の紹介」と「オファー」の間には、それぞれの受け取り方の差がある可能性

も考えられるが、より経験値の高い40代・50代の特徴と言えそうだ。

なお有意差が認められたのは、性別ではなく年代だった(回答数の多かった 40・50 代で 検証)。学位による有意差も認められなかった。

「仕事に対する満足度」と「職を得た方法」には何かしらの関連性があると仮定し検証を 行ったが、特に関連性は認められなかった。(具体的には知人の紹介等に比べ、公募等自発 的な方法の方が満足度がより高いのではと仮定したが、関連性は見られなかった。)

総合すると、回答を5つに分類できたことからもパターンは多くはなく、大きく「人からの紹介」と「公募」に分類された。「人からの紹介」は常に期待できるわけではないので、 仕事を得るためには、インターネット等を通じて公募情報をこまめにチェックする必要が あるということを示している。

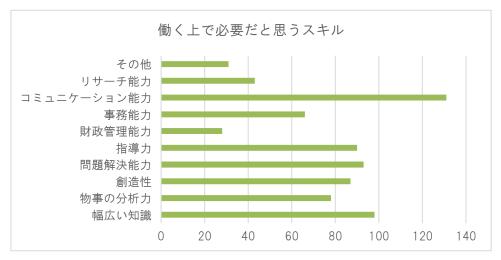
また分類した回答には反映されていないが、「人脈づくりが大切」・「誠実に仕事をこなすことが大切」といった意味合いの記述も多く見られた。直接的な「職を得る方法」とは言えないが、どのような場であれば自分が活躍できる可能性がありそうか等、未来の仕事のために自己管理するスキルが求められているようだ。

(10) 働く上で、特に必要だと思うスキル【アンケートの質問番号 19】

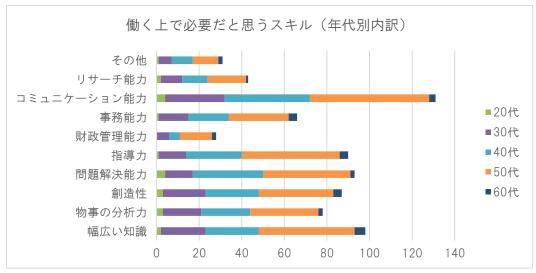
- ·有効回答数:155/178
- ・以下の項目から該当すると思う項目を選ぶ質問。(該当欄にです。ですると思う項目を選ぶ質問。(該当欄にですると思う項目を選ぶ質問。(

| □幅広い知識 □物事の分析力 □創造性 | □指導力 □財政管理能力 □事務能力 | □リサーチ能力 □その他* |
|---------------------------|--------------------------|------------------|
| □問題解決能力 | □コミュニケーション能力 | |
| *「その他」について | は、記述を引用した。 | |

① 全体の回答 (パーセンテージ)



② 年代別内訳



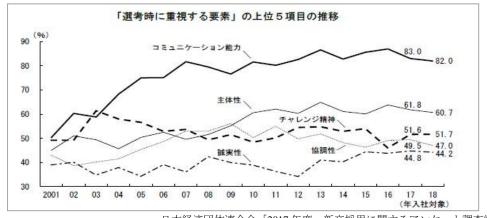
年代別による大きな差は見られない。1位の「コミュニケーション能力」については、「その他」欄の記入回答においても関連する言葉が多く見られた。

- ③ 「その他」の回答(記述を引用)
- 1) 20代(回答人数 6)
 - ○言語力
- 2) 30代 (回答人数 34)
 - ○伝手とコネ
 - ○求心力
 - ○演奏技術
 - ○おもいやり
 - ○常に探究心を持つこと
 - ○ストレス耐性
- 3) 40代 (回答人数 48)
 - 〇行動力
- ○ブランドを生かし、学生は企画書政策や図面、トータルコーディネートを自分の頭で考え創る勉強が必要。大学で大小様々なイベントを失敗させてもよいのでやるべき。奏者のみでは金にならん。
 - ○演奏能力
 - ○語学力、パソコンの知識
 - ○コラボレーションスキル、語学力
 - ○情熱
 - 〇向上心

- ○気がつくこと
- ○演奏技術
- ○専門技術
- 4) 50代 (回答人数 62)
 - ○頭を下げる力、謝れる力、おかしなプライドを捨てる力、社会の一般常識
 - ○体力、気力、鈍感力
 - ○他人の立場で考えること
 - ○忍耐力・柔軟性
 - ○忍耐心、柔軟性、協調性、個性、自身
 - ○専門分野以外の方々との交流をする能力
 - ○クリスチャンとしての霊性の信仰、これがすべてに先立って大切
 - ○勉強の継続、工夫
 - ○物事を理解・納得・伝達する能力
 - ○時代の先読み!! 現在の価値観にしばられない事
 - ○人間性
 - ○寛容性
- 5) 60代 (回答人数5)
 - ○社会と時代の価値観の変化を認める力
 - ○文章表現、語学的素養、論理的な思考力

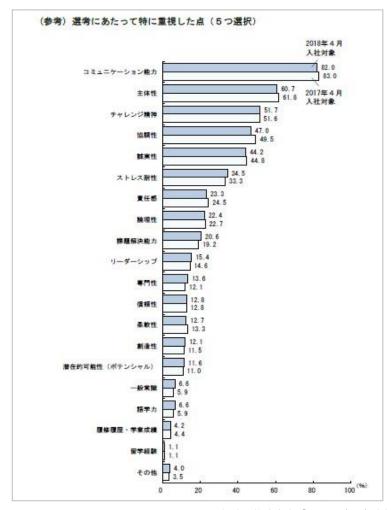
④ 経団連資料との比較

日本経済団体連合会「2017年度新卒採用に関するアンケート調査結果」⁷によると、「選考時に重視する要素」・「選考にあたって特に重視した点」の両者において「コミュニケーション能力」がトップとなった。全体的な結果でも 20代~50代の結果においても、「コミュニケーション能力」は一位であり、一般的な需要と一致していることが分かる。



日本経済団体連合会「2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」より

 $^{^7}$ 一般社団法人 日本経済団体連合会「2017 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」 http://www.keidanren.or.jp/policy/2017/096.pdf (2018 年 4 月 2 日閲覧)



日本経済団体連合会「2017年度 新卒採用に関するアンケート調査結果」より

(11) 在学中に身につけたかったスキル【アンケートの質問番号 20】

- 有効回答数: 142 / 178
- ・「ある」・「ない」の該当欄に○、「ある」と答えた場合には具体的にどのようなスキルかを 記述(自由回答)
- ・集計時に、回答を下記の9項目に分類
 - 1. 語学力
 - 2. コミュニケーション力
 - 3. 求人情報の収集力
 - 4. 仕事を得る方法
 - 5. 指導力
 - 6. 音楽に関すること
 - 7. その他の知識
 - 8. その他
 - 9. マネジメント力

・「ある」の中でも同様にメッセージ・自己反省・意見のようなものがあったが、それらは 全て「その他」に分類した

① 年代別回答数

| 年代 | 有効回答数 | 「ある」 | 「ない」 | 具体例回答数 |
|------|-------|----------|----------|--------|
| 20代 | 6 | 3 (50%) | 3 (50%) | 3 |
| 30代 | 30 | 19 (63%) | 11 (37%) | 19 |
| 40 代 | 43 | 28 (65%) | 15 (35%) | 28 |
| 50代 | 59 | 44 (75%) | 15 (25%) | 44 |
| 60代 | 4 | 2 (50%) | 2 (50%) | 2 |

② 「ある」を答えた人の年代別回答

| | 語学力 | コミュ 力 | 収集力 | 仕事 | 指導力 | 音楽関 連 | マネジ メント | 知識 | その他 | 合計 |
|------|----------|----------|--------|---------|--------|----------|------------|---------|----------|-----|
| 20代 | 3 (43%) | 1 (14%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 1 (14%) | 0 (0%) | 2 (29%) | 0 (0%) | 7 |
| 30代 | 5 (15%) | 4 (12%) | 1 (3%) | 7 (21%) | 3 (9%) | 3 (9%) | 4 (12%) | 1 (3%) | 5 (15%) | 33 |
| 40 代 | 9 (24%) | 1 (3%) | 0 (0%) | 2 (5%) | 2 (5%) | 7 (19%) | 2 (5%) | 4 (11%) | 10 (26%) | 37 |
| 50代 | 15 (27%) | 2 (4%) | 0 (0%) | 1 (2%) | 2 (4%) | 12 (22%) | 2 (4%) | 6 (11%) | 15 (27%) | 55 |
| 60代 | 1 (20%) | 2 (40%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 1 (20%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 1 (20%) | 5 |
| 合計 | 33 (24%) | 10 (7%) | 1 (1%) | 10 (7%) | 7 (5%) | 24 (18%) | 8 (6%) | 13 (9%) | 31 (23%) | 137 |

③ 年代別の最多回答

| 年代 | 最多回答 |
|------|-------------|
| 20代 | 語学力 |
| 30代 | 仕事を得る方法 |
| 40 代 | その他 |
| 50 代 | その他 |
| 60代 | コミュニケーション能力 |

全体的には、1 位が語学力、2 位がその他、3 位が音楽に関することであった。「語学力」に該当する回答では、「実際に会話ができるような能力を身に付けたかった」、「留学のときに困った」といった意見が目立つ。「その他」としては、特に50 代で、「パソコンの操作ができず困った」といった記述が目立った。また「音楽に関すること」としては、「自分自身がもっと意欲的に取り組めば良かった」といった反省を含むものから、「他の楽器の技術を学びたかった」等、様々であった。また在学中の反省として、「実技のことしか考えていなかった」、「演奏以外の仕事(音楽関係)が頭になかった」といった記述も目立った。また「一般の大学にあるような OB/OG 訪問や、色々な音楽関係の仕事場を見てみたかった」、「卒業生の体験談を聞きたかった」という意見も複数見られた。

以下は、在学中に身に付けたかったスキルが「ある」を選択した者が記入した、その具体

的な内容である。実際には、大学で学びたかったスキルにかんする記入が目立つ。以下、今後の参考用に、個人情報に触れない範囲で掲載する。

【20代】

- ◆実践的な音楽スキル・知識
- ·DTM(電子楽器とパソコンなどを接続して行う音楽制作)に関するスキル
- ・楽器の演奏方法(演奏のスキル)
- ・伴奏法
- ・楽器の構造等に関する知識(クラシック以外の楽器も含め)
- ・舞台に関するスキル (照明・演出等)
- ・舞踏(西洋・日本どちらも)

❖社会活動スキル

- ・実践性のある言語力
- ・国語(俳句・短歌・ポエム・シナリオ創作)
- ・ヨーロッパの劇場・市場がどのように機能しているのかといった知識
- ・様々な事柄や相手に対応できる音楽活動
- ・その他、広い分野における幅広い知識
- →ただし、これらの科目が実際に在学時代にあったとして(実在していた科目もあり)、在学中 にそれらを履修したかは疑問。必要な知識とは、実際的な場で初めて分かるものかもしれない。

【30代】

- ❖実践的な音楽スキル・知識
- ・演奏力
- ・楽器のメンテナンス(調律などの簡単なものでなく)
- ・より広いレパートリー作り
- ・アレクサンダー・テクニーク
- ・バレエ基礎

❖指導スキル

- ・指導力
- →個人レッスン等に役立つようなもの、教育学的な講義ではなく、もっと実践的なクラス指導
- ・子供のための教材についての知識

❖音楽活動スキル

・職を得るための知識 →留学先ではいかに自分を売り出すかという授業があった

- ・フリーランスとしてやっていくための準備
- ・セルフプロデュース能力
- ・自身のスキルを社会でどう発揮できるのかを考えるきっかけ作り
- ・社会貢献とは? 活動資金はどうやって調達するか? 原資は何か?を考えるきっかけ作り
- · 教室運営方法
- ・オーディション対策
- ・ヨーロッパ、海外の劇場のオーディション情報、エージェント情報、コンクール情報、こう した情報・機会のリサーチカ
- ・音楽関係の仕事のインターンシップ経験
- ・進路を意識する場として、卒業生から体験談を聞く機会(先輩談だけでは、結局、門戸が狭い)
- ・音楽関係の仕事にはどういったものがあるのかという情報
- ・音楽家として生計を立てる方法
- ・音楽家として職を得る方法
- ・求人情報
- →音楽を極めることは教わったが、どう生きて生活していくかは大学とは直結しなかった

❖社会活動スキル

- コミュニケーション能力
- ・一般教養(社会で活動していく上で、必要)
- ·事務、財政管理
- ・履歴書・音源作成に向けたパソコン能力
- ·語学力(多言語の、or 日常会話程度)
- ・セルフマネジメント力
- ・交友関係など、人とのネットワーク
- ・一般企業などに向けた就職活動への知識
- →病気・怪我・入院など、自分の身に何かあった際、演奏活動以外で生計を立てないといけないかもしれない。そうした場合に、音楽に携る仕事としてどういったものがあるのか、自分に何ができるのかを認識しておきたい。
- →自分自身にも問題はあるが、芸大に入れた→演奏で食べていくという図式にとらわれていた。 が、現実は厳しい。もっと視野を広く、演奏以外でどういう仕事につけるか考えるきっかけ作 りとなる機会があればと思う。

【40代】

- ❖実践的な音楽スキル・知識
- ・演奏心理学、あがり症克服法
- ・音楽療法

- ・アレクサンダー・テクニークなど、音楽をやる上での土台となるもの
- →卒業後に肩を痛めて、大変苦労したため
- ・即興演奏のスキル
- ・合唱やアンサンブルのスキル
- ・ソルフェージュの基礎力
- ・ジャズ理論
- ・楽譜作成ソフト
- ・オーケストラ・スタディのレッスン
- ・ソリストとしてのスキルの習得ではなく、現実的・実際的には、アンサンブル奏者としてのス キル
- ・プロのオーケストラで練習を積むインターンシップ・システム
- ・曲に対して色々な角度から分析し、深く研究していく力
- ・音楽配信に関するスキル

❖指導スキル

- ・室内楽の指導法
- ・レッスン法

❖音楽活動スキル

- ・仕事へのつなげ方
- ・大学では演奏面のみの学習で、社会に出たらどうしたらよいのか、少しでも知りたかった
- →こうした指導が専攻、門下ごとで対応に差があるというのは問題
- ・マネジメント・スキル
- ・演奏会に要する事務全般の知識(チラシ作成、受付回り、公演スタッフの集め方、進行表や企画書の作成、活動費用の獲得方法のほか、根本的な財務の知識)
- 自己プロデュース力
- ·公的資金獲得法
- ・支援を得る方法
- **→**身の丈に合った活動の資本を得るための、ごく最初の一歩を支えるようなサポート
- ・企画者との協働スキル
- ・社会の中で音楽家として生きる方法
- →留学先にはプラクティカム(一種のインターンシップ)システムがあり、プロのオーケストラで仕事をしながら学べる制度があり、苦学生にも明るい希望があった

❖社会活動スキル

・パソコン・スキル

- ・word、excel、illustrator、などのスキルを希望者はカリキュラムの中で選択し、マスターできるようになるシステム
- ・語学力
- ・音楽だけでなく、社会に出る前に。対人関係のスキルを身に付けるべき
- ・社会性・経済の知識
- ・グローバルに物事を見つめる視点
- ・芸術全般、リベラルアーツを包括的に学び、それらの知識をリンクさせて新しい発想や創造を 生み出す力
- ・肩書きにまどわされず、真に良いもの(絵画や音楽)を見極められる力
- ・礼儀作法

【50代】

- ◆実践的な音楽スキル・知識
- ・ポピュラー音楽の基礎と応用、クラシックとの対比のスキル・ペンタトニックの実用演習と旋 法の実技・即興音楽力のスキル・リズム演習、打楽器の基礎と応用のスキル・オンビートとオ フ・ビートの体感的理解のスキル・発声法、喉をこわす理由の理解
- ・アンサンブル・スキル
- ・即興演奏力(コード演奏)
- ・自分の専門以外の楽器の技術
- ・指揮の技術
- ・曲の創作力
- ・音楽の分析能力、特に和声分析(コードネームでの演奏力)

❖指導スキル

- ・教員としての具体的なスキル
- ・指導法(子供、あまり弾けない子、障害のある子に対して)
- ・合唱、吹奏楽などの指導力

❖音楽活動スキル

- ・コンサート企画力
- ・音楽マネジメント
- ・著作権の取り扱い方
- ・マーケティング
- ・社会が音楽を必要とする理由と現状の理解力のスキル

- ・我が国における音楽の GDP とその構造の理解と、その中でどうしたら音楽で生活ができるかという意識、具体的なスキル

❖社会活動スキル

- ・パソコン
- ・論文作成力・文章作成スキル
- ・人脈づくり・洋楽の人達との交流
- ・社会の中で仕事をするために必要な専門知識
- ・卒業後のことを考える時間(セミナー等)
- ・音楽以外の知見(一般社会の常識、マナー(音楽界だけではかたよりがある))
- ·目標達成法
- ・社会性、コミュニケーション能力
- ・偉人と交際する際の礼儀作法
- ・語学(英語、アジアの言語、多言語)
- ・社会に出てから必要になることを学ぶ機会

【60代】

- ◆実践的な音楽スキル・知識
- ・ほかの楽器演奏技能
- ❖社会活動スキル
- ・語学力
- ・コミュニケーション能力
- ・論理的な思考力

3. おわりに

本アンケートの調査結果からは、音楽学部・大学院音楽研究科の実践領域(演奏系)の卒業生の多くが、フリーランス・アーティストとしての在り方にかかわり、卒業直後は特にその傾向が強い状況がうかがえた。収入変化や就労時間は個人差があるとはいえ、一般職との極端な違いは見られなかった。学部と大学院では後者の修了者の方がより仕事に恵まれ、年代が高くなるにつれ、勤務時間・年収ともに増えていく様子(時給換算的には、大きくは変わらない状況)も確認された。また結婚や子育てなどで常勤の形ではなくても、生涯にわたるキャリア展開において柔軟に音楽に携わる仕事に就いている様子も浮き彫りとなった。回答者のほとんどが音楽に携わる仕事に就き、就労環境にさまざまな問題を抱えつつも満足度が高いことは、本学の専門性の高さ、仕事のやりがいの高さを示しているといえる。

一方、特に卒業直後の20代が収入・就労時間の両面で厳しい状況に置かれていることも 浮き彫りになった。おそらくその理由ないし対策として挙げられるのが、上記で転載した 「在学中に身につけたかったスキル」に寄せられた卒業生の声であろう。具体性や表現の違いはあるものの、30~50代でおおよその内容は驚くほど重なっており、そのほぼすべての 項目が、「社会で必要とされる音楽家になるために必要なスキル」、「フリーランス・アーティストとして活動していくために必要なスキル」に集約される。つまり社会との接点を持つ 意識・持ち方を在学中にどう習得するかが問われていると言える。本調査結果は卒業生の実体験からの貴重な声を集積したものであり、この先、卒業生や若手音楽家がより円滑に充実した音楽活動を展開できるよう、今後の各種支援の参考にしていきたい。

4. 参考:配布アンケート

| 1. 最終学位取得年度 2. (西暦でお答えください) | 卒業・修了時の年齢 | 常 3. 現在の年齢4. 性別(該当欄に○) | | |
|--|------------|--|--|--|
| | 歳 | <u> 男性・女性</u> | | |
| 5. 現住所(都道府県名) | 6. | 本学で取得した学位(該当欄に〇) | | |
| | | 学士 ・ 修士 ・ 博士 | | |
| 7. 在学中の専攻(該当欄に〇 |)) | | | |
| 作曲 声楽 器楽 | 指揮 邦楽 | | | |
| 8. 卒業・修了直後の状況(該 | ∷当欄に○・複数回答 | ः च]) | | |
| 進学(留学等) | 進学準備 | 進路未定 | | |
| 就職活動 | 企業に正規として | 就職 企業に非正規として就職 | | |
| 専任の教員として就職(該当欄に○) (小・中・高・短大・大学・大学院) 非常勤講師として就職(該当欄に○) (小・中・高・短大・大学・大学院) | | | | |
| 本学で職を得た(その場合そ | の役職名: |) | | |
| 自営業 (教室経営等) | 音楽教室等の講 | 師として就職 | | |
| オーケストラに就職 | | | | |
| その他 (| |) | | |
| | | 1 | | |

| 9. 卒業・修了直後のおよその |)勤務時間数(時間 / 週) | |
|-----------------|----------------|----------------------------|
| およそ週 時間 | | |
| 10. 現在のおよその勤務時間 | 数(時間 / 週) | |
| およそ週 時間 | | |
| 11. 卒業・修了後、初めての | 職を得るまでにかかった時間 | |
| 12. 現在の職業(できるだけ | 具体的にご記入ください) | |
| 13. 現在の職業の仕事内容 | | |
| | | |
| 14. 昨年の年収【世代別の状 | 況資料とさせていただきます | r。差支えなければご記入ください。 】 |
| | 円 | |
| 15. 過去3年間での収入の変 | 化(該当欄に〇) | |
| 増加した | 変わらない | 減少した |
| 16. 現在の仕事のうち、音楽 | 関係が占める割合 | |
| % | | |
| | 2 | |
| | | |

| 17. 現在の仕事に対する満足度(該当欄に○) | | | | |
|---------------------------|-----------------|-----------|--|--|
| 満足している | | | | |
| (その理由) | | | | |
| | | | | |
| 不満がある | | | | |
| (その理由) | | | | |
| | | | | |
| その他 | | | | |
| | | | | |
| 18. どのようにして現在の職を得まし | たか | | | |
| 18. とのよりにして現住の極を恃ましたか。 | | | | |
| | | | | |
| | | | | |
| 19. 働く上で、特に必要だと思うスギ | トル(該当欄に☑・複数回答可) | | | |
| □幅広い知識 | □指導力 | □リサーチ能力 | | |
| □物事の分析力 | □財政管理能力 (| □その他) | | |
| □□創造性 | □事務能力 | , | | |
| □問題解決能力 | □コミュニケーション能力 | | | |
| | 3 | | | |

| 20. 在学中に身に | 付けたかったと感じるスキ | ールはありますか。 | (該当欄に○) |
|------------------|------------------------|-----------|---------|
| ある | | ない | |
| あると答えた ご自由にお答 | 方で、それは具体的にどの えください。 | のようなスキルです | すか。 |
| | | | |
| | | | |
| | | | |
| | | | |
| | | | |
| | | | |
| | | | |
| | ご協力あ | りがとうございま | した。 |
| | | 4 | |
| | | | |

以上